

管理問題の歴史的 성격

～アメリカ労務管理形成史の方法に関連して～

平 尾 武 久

(1)

管理問題の歴史的 성격の把握をめぐる今日の議論の中心は、現代資本主義と管理問題との関連性を、歴史的展開のなかでいかなる構造的性質をもったものとして描き出すか、という問題として提起されている点に求めることができるだろう。そして、そのためには、独占と管理との論理的必然的關係を、現実の歴史的展開に即して解明することが要請されるのである。

さて、今日においては、独占的大企業群の管理機構が現代資本主義経済の枠組みのなかで、きわめて大きな比重をしめているのみならず、その管理機構自体は、自らの範囲をこえて、「生産的基礎過程において完成した実質的包摂、労働者支配が、さらに上部構造へ、あるいは地域社会へという形で拡張しつつある¹⁾」という事態をもたらしている。この現実の基盤に立ってみるならば、独占的大企業群の企業内管理機構の再編をめぐる資本・賃労働関係の矛盾の実態とそれを貫く論理をどうとらえていくか、という問題は、経営学批判の社会的役割において重要な意味をもっているといわなければならない。

しかも、このような工場・職場を起点とする一定の全社会的政策体系によって組み立てられる賃労働の管理機構が、金融資本の寄生的な重層的支配構造（＝独占的蓄積様式²⁾）を基盤として、組織労働者の支配的部分の「体制

内」包摂を具体化するメカニズムの一環を構成しているという現実³⁾を直視するとき、独占と管理との関連把握という理論的課題があらたな社会的意義をもって提起されているように思われる。そして、この課題の解明にとって、管理問題の歴史的分析が不可欠であることはいうまでもない。

以前、「アメリカ労務管理形成史の一視角」において若干の検討を試みたように、企業内労資関係の歴史的構造と動態そのものとしての管理問題は、独占的大企業群がアメリカ資本主義の支配的な担い手として登場した世紀転換期(1890年代から20世紀初頭)以降、これら独占的大企業群が労働者を企業内にひきつけて支配する体制を確立していく過程で一般化したのである⁴⁾。この事態は、アメリカにおける独占の形成・確立にもとづく独占的蓄積様式が産業構造の「近代化」・高度化を基盤として展開されうる条件を、工場・職場のなかから形成したことを意味するものであった。

したがって、歴史的現実としての「科学的管理」の枠組みは、アメリカ金融資本の成立過程⁵⁾に内在して、「工業的アメリカ」の産業構造の中心的位置をしめるにいたった中西部鉄鋼業の管理機構そのもののなかから生み出されたものと考えなければならない。

しかし、そのことは、管理問題がただちに独占的大企業の成立と結びつくことを意味するわけではなく、むしろ、独占段階に特有な蓄積様式の一環として、それが社会的な問題として顕在化することなのである。そして、この管理問題は、具体的には、企業内労資関係の矛盾する実態を必然的に反映したものとしてしか出現しないのである。というのは、管理機構そのものが、社会的な規模での資本・賃労働の矛盾・対立を背景としながら、企業内労資関係の展開に一定の役割を果しつつ、それを安定化する客観的構造をつくりあげたからである。

このように、管理機構の特質は、資本主義本来の蓄積様式における専制的な兵營的規律の貫徹として、資本の側から一義的に規定しうるものではなく、独占段階での生産現場における労資の葛藤に対応して、労働者を独占体の側

にひきつけて支配する、という歴史的構造のもとで、いわば意識的かつ機構的に再編成されたということに求められる。この関連こそが管理問題形成の現実的基盤をなしたと理解しなければならない。すなわち、管理問題の史的構造は、管理の機構そのものが、独占の支配構造における資本の本来的蓄積の強化という側面と同時に労働者をして、その管理の強化を「妥当」なものと思わせる体系を含むものでなければならなかった。かつて木元進一郎教授が指摘された「資本主義の独占段階になって『本格的に労務管理として形成されるようになった』といわれる場合、『本格的』にという言葉⁶⁾」の意味は、このような内容をもつものとして把握すべきであろう。

したがって、この小稿が当面する管理問題の歴史的格をめぐり問題認識は、一方においては、「大量生産体制」を実現した生産過程における独占段階的特質を軸として展開する社会的な資本・賃労働関係の変化を見定めながら、他方では、逆にその社会的変化がいかに工場・職場の管理機構を再編させたのか、ということ論理的にも歴史的にも、どのように関連づけて解明するのか、という点に集約されねばならないのである。

ところで、今日、管理問題の歴史的格について、個別の独占的大企業の成立と直結させて考察するのではなく、生産過程を「大量生産体制」概念によってとらえ、それが独占的蓄積様式における管理機構のアメリカ的特質といかなる関連にあるのか、という視点からの検討がなされている⁷⁾。このことについて、森果教授は次のようにのべておられる。「独占資本主義をめぐり幾多の議論のなかで、この時代に固有の生産過程、生産力構造を折出するという基礎的研究は、生産の集積、生産の社会化、固定資本の巨大化、産業の重化学工業化、といった一般的規定からあまり先に進むことができぬまま、今日でも最も手薄な部分である。⁸⁾」と。教授のこの指摘は、経営学批判における管理問題の歴史的分析にとっても重要な意味をもっている。

森教授の示唆するところを当面の問題に即してみれば、管理問題の歴史的格の把握は、作業構造と管理機構の統合体としての「大量生産体制」を「工

業的アメリカ」の生産力発展の一環として把握し、それを独占的蓄積様式のなかに位置づける必要がある、ということになるであろう。つまり、管理問題の歴史的な性格は、独占的蓄積様式の特質を明らかにした『帝国主義論』の基本論理を介在させて解明されなければならないことを意味するように思われるのである。

このように考えるならば、管理問題の歴史的な性格は、かなり具体的な実態分析を必要とする。すなわち、基本的には『帝国主義論』の基本論理にそいながらも、「大量生産体制」という具体的な生産力構造が、一方では、生産の「社会化」のもとで巨大な協業組織を編成して労働者を集積していく過程の実態と、他方では、この体制が企業内に労働者をひきつけて支配するための物的基盤を保障するという実態を、独占的蓄積様式を媒介として分析しなければならない⁹⁾。そして、そこに展開する企業内労資関係の構造と動態のなかに管理機構のアメリカ的特質と独占に一般的な特質との違いと関連とを規定していくという方法的視角をもつことが重要であろう。

ひるがえって、独占段階それ自体が「死滅しつつある資本主義」であるという、いわば過渡的な性格の認識を前提とすると、今日、管理問題は、「資本の生産過程がもつ矛盾的構造を通じて、それに組織的に対抗し、それを揚棄していく労働者主体の形成¹⁰⁾」という労働者の実践的課題とわかちがたく結びついた問題史として歴史的検討の俎上にのせられている。そして、この問題との関連においてもまた、企業内労資関係を軸に、独占的蓄積様式の全機構をも視野におさめた管理問題の歴史的な分析に関する方法的検討があらためて注目される必要があるように思われるのである。

そこで、以上のような問題意識のもとに、アメリカにおける管理問題の歴史的な性格の理論的な把握について、土屋守章教授の所論を中心に若干の検討を試みてみたい。

1) 下山房雄稿「戦後日本資本主義の展開と労働者階級の主体形成」『現代資本主義と

- 労働者階級』(経済理論学会年報 第16集), 1979年, 54頁。
- 2) 独占資本主義の資本蓄積様式の特質に関しては, 橋本輝彦稿「国家独占資本主義分析の一視角」『研究年報経済学』(東北大) 第32巻第1号, 1970年, 52-54頁を参照されたい。
- 3) 拙稿「『雇用管理の特質』『経済と経営』(札幌大) 第16巻第1号, 1979年, またこの点については, 「シンポジウム, 大経営の工場実態調査」『労働運動』157号, 1979年を参照されたい。
- 4) 拙稿「アメリカ労務管理形成史の一視角」『経済と経営』(札幌大) 第10巻第4号, 1980年, 23頁。
- 5) アメリカ金融資本の成立過程の性格については, 森杲著『アメリカ資本主義史論』ミネルヴァ書房 第5章および同稿「トラスト形成後のU. S. スチール会社の資本蓄積」『経済学研究』(北大) 第17巻第3号, 1967年を参照されたい。
- 6) 木元進一郎著『労務管理』森山書店 1972年, 1頁。
- 7) さしあたり, 坂本和一著『現代資本主義の生産様式』青木書店 1976年, 同著『現代巨大企業と独占』青木書店 1978年, 塩見治人著『現代大量生産体制論』森山書店 1978年, 森杲稿「大量生産体制の歴史的 성격」『経済学研究』(北大) 第29巻第4号, 1979年, 中村静治稿「大量生産と大量生産方式(体制)の概念」『エコノミア』(横浜国大) 第67号 1980年などをあげることができる。
- 8) 森杲稿「前掲論文」, 50頁。
- 9) 相沢与一稿「現代の貧困化と労働労働」(上)『現代と思想』第27号, 1977年, 253-254頁。
- 10) 兵藤釗著『日本における労資関係の展開』東大出版 1971年, 53頁。

(2)

さて, わが国のアメリカ管理問題の歴史的な研究において, 方法論的問題を含んだ新しい分析視角が土屋守章教授によって提起されたことは周知のところである。土屋教授は, 「米国経営管理論の生成」において, 「過去の経営管理論を解明することは, 現代の問題と現代の理論との関連を理解する一助となる¹⁾」という観点から, アメリカの経営管理の歴史的展開に関する学説史研究を試みられた。したがって, 学説研究に主眼をおく教授のこの労作は, 本稿の主題とはおのずから研究の方向を異にするものであるが, 教授の強調される「基盤の探究」の理論展開は, 管理問題の歴史的な性格の把握に関して貴重な素材を提供しているのである。そこで, 教授の主要な論点を確認することからはじめよう。

教授は、まず「過去の現実の企業経営における如何なる実践的課題が、その当時の社会的経済的環境におけるそれに対する解答としての管理論を生んだのであるか、ということまで問題としなくてはならない²⁾」といわれ、「実践的課題から決して解放されることのなかった米国経営管理論においては、常に現実の企業経営から提起される実践的課題と、それに対する価値評価をなすべき社会経済的背景との関連³⁾」に着目すべきことを明言された。そして、この認識に立脚して、「管理問題発生の基盤の追求は、いわば、米国経営管理論史の第一幕における状況設定である⁴⁾」として、管理問題が文字どおり問題として登場してくるものの歴史的基盤の具体的把握を強調された。したがって、この見地は、教授の所論の基本的論拠ともなっているといえよう。

土屋教授は、「管理問題と独占形成」との関連に関心をよせて言及され、「経営学界の一部」では、管理の「科学化」と独占形成とを直接結びつけて乱暴な議論を展開しているとして、経営学批判の体系におけるアメリカ管理問題の歴史的研究のこれまでの方法を非難されたのである。

すなわち、教授は、「能率増進運動」の内容が「その発生に関しては独占形成もしくは独占企業それ自体と何ら直接の関係はなく、またこれらがその後、少なくとも19世紀の間に、ある特定の独占企業によって採用されたという証拠は全くないし、広く普及した管理方式であったかいかもわからない⁵⁾」として、これまでの歴史的研究における実証分析の不十分さを指摘された。そして、教授は、「1870年代80年代におけるプールおよびトラストは、かつて独立し、相互に激しい競争をしていた多数の企業のいわば『ルーズな連合』にすぎず、全体として管理的にも統合するための機構も、またその意識すらも存在していなかった。独占の最高首脳者も、自ら直轄する構成単位を経営しており、傘下企業もしくは傘下工場の経営者といえども、自立性の強い事業家であった⁶⁾」と断言され、歴史的事実として、独占形成のもとでは、管理問題認識の素地はまったく存在しなかった、と結論づけられたのである。

教授によれば、アメリカにおける独占形成という歴史的事態は、能率意識

を一般化するほどに社会的影響力をもたなかったのであり、「管理問題と独占形成との関連は、今迄のところ、事実にもとづかない観念論として議論されているにすぎない⁷⁾」ものであった。それゆえに、教授は、「米国において管理問題を認識させ、それに対する科学的接近を開始させた具体的基盤における管理上の実践的課題⁸⁾」を歴史的に把握しなおすことの必要性を提示されたのである。

ところで、この小稿の問題意識である、独占段階における労務管理形成のアメリカ的特質の把握に関連させて、土屋教授の問題提起に接近するとき、なによりもまず、教授が、管理問題の歴史的 성격の規定に関して、東部機械工業の現実的展開のうちに、「作業現場の管理一般の問題⁹⁾」を位置づけて、その「基盤の探究」に基本的な重要性をみいだされたことに注目しなければならない。というのは、教授は、管理問題の歴史的解明にとって、東部機械工業の管理実践の展開のなかにそのアメリカ的特質を確定しようとされたからである。そして、教授の問題提起とその所論は、「19世紀末葉のアメリカについての、経営史学的研究¹⁰⁾」を管理史研究のなかに定位させることになったといってよいだろう。

これまで、管理問題の歴史分析は、ほぼ「科学的管理法」成立史論として、テイラー・システムという限定された対象に集中してきたこともあって、おおよそ共通する歴史認識に依拠しながらも異なる見解が対立的に展開されるという途をたどってきている。もちろん、そのこと自体、アメリカ管理問題の歴史的特質に関する研究の深化を意味するわけであるが、土屋教授がその研究史を十分意識されて、その批判をとおして一定的方法的視角を具体的に提示されたことは、管理問題の史的研究にとってきわめて論争的かつ問題提起的であったように思われる。したがって、教授の管理問題に関する経営史学的研究は、「綿密な史実実証性¹¹⁾」を重視し、現代管理問題の歴史性をより具体的な視角から把握していく方法を研究史のなかに定置する意義を有するものであった。

このような理論的位置を占めた土屋教授の所論は、まずもって、「管理問題を発生させた具体的基盤の中から、……『管理の科学』化の方向を確認¹²⁾」するための歴史分析の展開そのものに中心をおくのであるが、その含意するところは、中川敬一郎教授の示した「アメリカ観」¹³⁾を基礎として、南北戦争後のアメリカ産業史のなかで、「個人主義的企業者」の積極的な機会追求的管理活動を産業構造の変化にかかわらしめて理解し、東部機械工業における「大量生産体制」の先進性こそが企業者の意識的な管理機構の編成をもたらしたことを明確にすることであったのである。

ここに明らかなように、土屋教授は、「比較経済史学」が蓄積してきた理論とそのアメリカ分析の成果を十分ふまえて、管理史研究における、いわゆる「藻利理論」のもつ歴史認識を克服していく方向を提示されたといっても過言ではないだろう¹⁴⁾。それゆえに、教授は、「労働節約的機械が米国に大規模に普及した¹⁵⁾」ことの歴史的事実的分析を欠く研究の限界を自覚された結果、アメリカン・システム(American System of Manufacturing)の生産技術体系を基礎とする「大量生産体制」を具体化した東部機械工業の独自の地位を明確にしたうえで、管理問題の所在を、企業者活動の態様と管理の形成との相関関係をいかに動態的に描き出すか、という点に集約されたのである。

しかしながら、教授のこの経営史学的接近による「基盤の探究」のもつ理論的有效性を評価するとしても、東部機械工業的な「大量生産体制」の技術的側面から、しかも、企業者の意識的活動の態様との関連においてのみ、管理問題の発生を解明しようとする方法には再検討すべき問題があるように思われるのである。そこで、以下において、「管理問題認識の基盤」についての従来の諸見解に対する土屋教授の批判的論述にそってやや立ち入って検討してみたい。

1) 2) 3) 土屋守章稿「米国経営管理論の生成」(1)『経済学論集』(東大)第31巻

第4号, 1966年, 33頁.

4) 土屋守章稿「前掲論文」, 44頁.

5) 土屋守章稿「前掲論文」, 45頁.

6) 土屋守章稿「前掲論文」, 46頁.

7) 土屋守章稿「前掲論文」, 47頁.

8) 土屋守章稿「前掲論文」, 49頁.

9) 土屋守章稿「前掲論文」, 56頁.

10) 佐々木恒男稿「チャーチ研究—土屋守章教授の所論にかかわらしめて—」『武蔵大学論集』第24巻3・4・5号, 1976年, 128頁.

11) 土屋守章稿「書評—雲嶋良雄『経営管理学の生成』」『経済学論集』(東大)第31巻第2号, 1965年, 99頁.

12) 土屋守章稿「前掲論文」, 44頁.

13) 中川敬一郎稿「ニュー・イングランド産業革命と大量生産体制の発展」(2・完)『経済学論集』(東大)第30巻第1号, 1964年, 49頁., この中川教授のアメリカ観について, 森杲教授は次のようにのべておられる。「中川氏は, アメリカ経済を一貫して国際連関のなかに, かつ後発資本主義の立場からとらえようとする。ニュー・イングランドの工業化の進展の路線上にアメリカ国民経済の形成をみるのではなく, なによりも国際連関から生じた各セクションの発展とそれを国民経済に統括していく物質的および主体的推進力を問題にし, その面でのアメリカの独自性こそがアメリカを大量生産社会の先頭にたたせたともっているようである。」と。(森杲著『前掲書』87頁.)

14) 土屋教授は藻利教授の管理問題の認識に対して次のようにのべておられる。「管理の問題が認識された1880年代は, 『機械的合理化』が一段落した時期であったか否かも, 疑問である。……われわれは, 管理の問題が認識されるに至った根拠を, 藻利教授のように単純に理解することによって, 事足りりとはしない。」と。(土屋守章稿「前掲論文」, 44頁.)

15) 土屋守章稿「前掲論文」, 44頁.

(3)

すでに明らかなように, 土屋教授が機会追求的な企業者意識を重視され, 東部機械工業の「大量生産体制」の技術的基盤の展開がアメリカ資本主義の発展に重要な貢献をなした, とみなす「企業者史的研究方法¹⁾」をアメリカ管理史研究に導入されたことは評価されなければならないが, 教授の管理問題認識と「基盤の探究」に関して, 最も重要でかつ決定的問題点は, 管理問題の歴史的 성격の理論的把握において, 認識の基準に東部的条件としての互換制的な「大量生産体制」の成立をおき, 世紀転換期における独占的蓄積様式

への展開という歴史的現実をその基準から意識的に除外してしまわれたことである。

教授は、「管理問題の認識と独占形成」について次のように指摘しておられる。独占的大企業の管理問題の認識については、「主要産業における寡占体制の成立によって独占企業の側が、企業内の管理の問題にあらためて目を転じ、管理的統合を課題とした時期、すなわち20世紀初頭の20年間のことであった²⁾」と。そして、「19世紀末の管理問題およびその解決策としての管理手段が、独占的大企業とは関係がなかったという事実³⁾」を強調しておられる。

ここですぐわかるように、教授は、管理の問題史を19世紀末葉と20世紀初頭という一応の段階的理解を前提にしておられるものの、いわゆる世紀転換期のアメリカ独占資本主義＝金融資本の構造的変化がもつ独自の性格の位置づけと管理問題との関連性については、これをほとんど無視してしまわれている。とはいえ、教授は、今迄のところ乱暴な観念論に終始していると断定される管理問題と独占との関係について、「この関連を事実として論証するためには、まず、実証的な研究態度にもとづく独占形成の解明が、要求されるであろう⁴⁾」といわれる。しかし、教授の理論構成は、この指摘とは逆に、「基盤の探究」にかかわる「ある種の『前提』—管理問題認識の基盤が独占の形成・確立である—」を否定する方向で、歴史的実証分析の対象を積極的に東部機械工業に限定することによって、むしろ、かえって管理問題の歴史的 성격の本質に接近することに、あらかじめ制約を加えてしまう結果になったのではないかと思われる。

いうまでもなく、教授は、管理問題を、「作業現場の管理一般の問題」として提起されたものととらえ、それを「大量生産体制」の進展→内部請負制の崩壊という連鎖のなかに位置づけ、企業経営者の積極的な機会追求的行動の東部機械工業的条件のなかに固有に発生するものと理解されたわけであるが、そこでは、管理問題のアメリカ的特質がアメリカン・システムの展開にアンジヒに結びつけられて把握された⁵⁾。そして、教授は、「大企業が科学的

管理に対し無関心であった⁶⁾」ことを事実として論証しようとしたのである。

したがって、教授は、問題をもっぱら、ニュー・イングランドの「大量生産体制」の発展とその連続性における、東部機械工業での「いっその進展」を前提にし、そこに管理問題の所在を収斂させ、その当然の結果として、この東部機械工業の経済的位置との関連で管理問題のアメリカ的特質の把握にむかわれたように思われる。しかし、そのことによって、結果的には、19世紀末葉のアメリカ資本主義の変容とフロンティア消滅後の90年代からの世紀転換期の金融資本の具体的成立との間における、基本的に異なる資本・賃労働関係の編成という歴史的变化の内実を微細わたって補捉し、それと管理問題との関連を客観的にあとづけていくという方法的視角は看過されざるをえなかったのである。

もちろん、土屋教授は、東部機械工業を自立的な産業部門としてアメリカ産業構造のなかに位置づけておられるが、問題は、世紀転換期の歴史的情況変化のなかであって、東部機械工業がアメリカ資本主義の支配的資本として経済構造の前面に押し出されうるような機構を編成していたのか否か、という点である。そして、端的に言って、管理問題は、決して、資本の力能による生産技術の体系的変化にのみ規定されるものではないわけであるから、世紀転換期の独占的蓄積様式の展開過程が生み出す産業構造において、互換制・専門化・標準化という観点から東部機械工業の管理実践をもって、そのアメリカ的特質を代表するものと断言することはできないように思われる。というのも、東部機械工業のアメリカ産業史における地位は、セクション経済の枠をこえて、その管理実践を全産業的領域のなかで機構として再生産していくことを保障しうるものではなかったといわざるえないからである。

そこで、問題は、基本的には、教授のアメリカ経済史のとらえ方の問題に深くかかわって検討されなければならないだろう。教授は、アメリカ産業の発展について次のようにのべておられる。「南北戦争後、急速に拡張された鉄

道網が、アメリカの製造業に顕著な影響を与えた。すなわち、まず鉄道建設工事のために、機械・鉄工業の発達が刺激された。ついで、建設された鉄道網によって、農産物および工業製品の地方的な市場が全国市場に連結し、商業および工業の中心としての都市が発達した。都市を中心とする全国的な規模での新しい市場が製造業における企業に対し、激しい競争を課すとともに成長の機会を与えた。⁷⁾」と。

この認識からも明らかなように、土屋教授は、中川教授の示した企業者機会と市場条件というアメリカ経済史の理解に沿って、鉄道建設—都市の発達—国内市場拡大—企業者機会の増大という、いわば市場条件という要因から東部機械工業の位置づけを明確にされ、「精密な兵器工業でつちかわれた伝統をもち、これを支える熟練機械工と製造技術や製造工程の改良に積極的関心をもつ企業経営者をもっていたニュー・イングランド機械工業⁸⁾」のアメリカ経済発展における主導的役割を高く評価した。こうして、教授は、中西部との対比において機械工業の東部的発展を重視され、「販売活動軽視と生産活動重視の傾向⁹⁾」の強化をつうじて、東部機械工業が「大量生産体制」の先進性を生み、そこに全産業的領域のなかに管理を伝播させることを可能にする主体的な推進力がつちかわれたと理解されたのである。

しかしながら、教授の所論においては、アメリカ資本主義の特異な発展のなかにあって、東部機械工業が中西部鉄鋼業といかなる関係を取りむすび、管理問題の展開にどのような構造的特質をもたらしたのか、という点の理論的解明はみられず、もっぱら中西部鉄鋼業と切断したところで、いわゆる産業構造論的視角から、東部機械工業の独自性が強調された。そして、教授は、19世紀末葉の鉄道建設—都市の発達—国内市場の拡大という連鎖のうえに、東部機械工業の発展に規定された「大量生産体制」のもとでの管理の技術的側面を描き出し、そこに管理の「科学化」の歴史的継承性をもとめられた。

したがって、「作業現場の管理」を管理問題の中心におき、その「合理化」の展開の延長線上で管理機構の編成の歴史的事実をみきわめようとする教授

の分析視角からすれば、70年代80年代と世紀転換期との管理問題の質的変化の実態はそれほど重要な位置をしめなかったのである。

以上のように、土屋教授の所論は、管理問題と東部機械工業との直接的関連性を強調するあまり、管理問題のアメリカ的特質の「社会的経済的背景」に関する本質理解に問題点をのこすことになった。このことは、いいかえれば、世紀転換期におけるアメリカ資本主義の構造的変化のなかに、重工業的産業構造の発展をいかに位置づけ、またアメリカの経済史における金融資本の成立との関連で管理問題の歴史的な性格をどのように把握すべきか、総じて、管理問題のアメリカ的特質形成の歴史的根拠をどこに求めるか、という問題を問い直しているといつてよいだろう。

- 1) 中川教授のこの方法については、橋本輝彦稿「経営史研究の方法」、角谷登志雄編『マルクス主義経営学論争』有斐閣1977年、208-213頁を参照されたい。
- 2) 3) 土屋守章稿「前掲論文」、48頁。
- 4) 土屋守章稿「前掲論文」、49頁。
- 5) 例えば、教授は次のようにのべておられる。「企業の生産活動がなされる作業現場において、工学技術の発達で、この細分割された個々の作業を統一のとれた全体に組織化することこそ、『管理の科学』の出発点にあたっての基本問題であった。」と。(土屋守章稿「経営学における組織論の研究」『経済学論集』(東大)第33巻4・5号、1968年、74頁。
- 6) 土屋守章稿「前掲論文」、49頁。
- 7) 土屋守章稿「管理機構の編成原理」『商学論集』(福島大)第33巻第1号、1964年、62-63頁。
- 8) 土屋守章稿「米国経営管理論の生成」(1)、53頁。
- 9) 土屋守章稿「前掲論文」、54頁。

ところで、土屋教授がアメリカ東部機械工業の作業現場こそ管理の「合理化」を意識的に展開する基盤を有し、そこに19世紀末葉の管理問題が発生した、ととらえておられる点について若干の問題点を指摘しておく必要があるだろう。

周知のように、教授は、その根拠を東部機械工業の互換制・専門機械による「大量生産体制」の発展とそこにおける内部請負制の展開・消滅との関連のなかにもとめられた。教授によれば内部請負制の崩壊と管理問題の発生は、東部機械工業に特有の専門化の進展、作業工程の細分化、作業内容の客観化を条件とする管理機構の再編過程で具体化したのである。

教授は、現実提起された管理問題について次のようにのべておられる。

「一方で分業の徹底とくに、労働者の熟練度にもとづく分業が進行し、細分割された作業のそれぞれを労働者に割り当てるに際しての作業の『計画』と『組織』とが重要な問題となった。他方で、作業工程の細分割された個々の作業単位を全体の目的のもとに統合することをも必要としたので、細分割された作業全体を管理者として『調整』することが重要な問題となった。¹⁾」と。しかも、そのことが、「不況期に生産現場における原価削減を唯一の対策とする製造企業に、幾重かの障害²⁾」をなしていた内部請負制の崩壊と結びついたものであったことを強調しておられる。

したがって、教授は、この内部請負制の崩壊過程と表裏一体をなす「大量生産体制」の展開に触発されて具体化した、労働者の「直用制」にもとづく管理職能—「計画」「組織」「調整」—に関する一般的性格をアメリカ的なものとして理解しようとされた³⁾。それゆえに、教授は、東部機械工業における職務の成立とその日常的な管理の諸活動の「調整」を「体系的管理運動」(systematic management movement)として特徴づけられたのである。

このようにして、土屋教授は、かつて中川教授が提示された「機械化の米国的特質と工場作業の合理化過程⁴⁾」における「大量的管理」の基本認識を継承し、アメリカ産業史における支配的かつ典型的な産業構造として東部機械工業の存在を位置づけ、互換制部品と単能工的工作機械体系によるニュー・イングランド産業革命以降の伝統的な「大量生産体制」のなかにも、アメリカン・システムの規模的拡大の条件と管理の「合理化」の態度を理解しようとされた。そして、教授は、この東部機械工業が、「鉄道建設にともなう需要に

つづき、興隆しつつあった中西部製造業からの資本財需要によって、生産規模拡大の機会を与えられ⁵⁾」てアメリカ的生産様式の発展を主導する産業たりえた、と評価されたのである。

ここで問題とされるべきは、東部機械工業におけるアメリカン・システムの具体的展開を視野におく際に「熟練機械工と製造技術や製造工程の改良に積極的関心をもつ企業経営者⁶⁾」の意識性を前面におしだしてくる点に関連するものである。

東部機械工業の生産力構造の技術的発展がいかに企業者行動に依存したとはいえ、それは、客観的現実との関連において問われなければならないだろう。しかし、教授は、この企業者意識が「東部的条件の中から、互換制部品制度や単能工作機械などの米国的産業技術が発展するとともに、企業経営に対する科学的接近の態度が芽生えた⁷⁾」として、生産技術の発展による作業工程の機械化という客観的現実を支えられたものであることを強調された。ところが、生産力構造としての東部機械工業の生産過程がもつ生産技術体系や労働力構成の特質については必ずしも明らかにされてはいない。

それでは、この点は、管理問題のアメリカ的特質との関連でどのような理論構成になっているのであろうか。すなわち、土屋教授が、企業者史的視角から、東部機械工業の「大量生産体制」の展開を生産過程の特質に即してどのように把握しておられるかをみてみよう。

教授は次のようにのべておられる。「作業工程の細分化は、一方で『作業の客観化』という米国的特質を促進させ、他方で、作業現場の管理についての問題を提起したのである。このことは、東部機械工業企業において、特に問題となったのである。⁸⁾」と。そして、その根拠を以下の7つの点にわたって提示された。それは、(1)「分業の原則」の徹底、(2)単能工作機械の普及、(3)内部請負制による企業者と熟練工の育成、(4)中西部新興企業からの需要、(5)生産活動重視、(6)原価削減のための作業現場への関心の高まり、(7)内部請負制の消滅と経営者の直接管理の可能性、である⁹⁾。

以上の根拠に立脚して、教授は、東部機械工業における専門化の進展、作業工程の細分化、作業の客観化による「大量生産体制」のアメリカ的先進性こそが、「米国において管理問題に対する認識を全体として高め、管理の科学化を進めた重大な基礎の一つである¹⁰⁾」と考えられた。もちろん、この点の指摘は、いわゆるアメリカン・システムの特徴として、一般的には正鵠を射ているといえるだろう。だが、「大量生産体制」の技術的發展に関する一般的規定から、ただちに管理問題のアメリカ的特質を把握することには多少無理があるように思われる。

事実、教授は、東部機械工業が「少数品種への『専門化』を促がし、かつ生産規模を拡大させた¹¹⁾」として「大量生産体制」の展開を強調されるが、しかし、それが、どこまで生産過程における技術体系のアメリカ的特質として、具体的に認識されているかは明確にされてはいない。したがって、教授が、東部機械工業企業における専門化、作業工程の細分化、作業の客観化という生産技術体系一般の発展をアメリカ産業史のなかでおさえ、その方法的視角にもとづいて、「作業現場の管理に関する科学が、英国や欧州大陸諸国においてではなく、まず米国で問題になった¹²⁾」と規定される点には疑問があるといわざるをえない。

このように、教授の管理問題把握は、その基底をなした「大量生産体制」の生産技術的規定において、生産の専門化、作業工程の細分化・客観化という一般的要因から説明され、そのことゆえに、労働過程においても、東部機械工業の工場・職場の労働力構成や機械労働の実態が具体的に明らかにされないままにおわってしまった。したがって、ここで重要なことは、管理問題の形成を東部機械工業に限定される場合であっても、生産技術の一般的性格規定からではなく、「大量生産体制」としてのアメリカン・システムの実態を生産工程の現実的な展開にまでおよんで分析してみなければならないということであろう¹³⁾。

土屋教授は、ニュー・イングランドを起点とする機械工業の「大量生産体

制」が管理問題の経済的基盤を形成し、そこでの生産技術の発展による生産活動の活発化をとおして、企業者が作業工程の「合理化」に関心をもったところに管理機構が独自の編成された、と把握されたわけであるが、教授の場合、一貫して、アメリカ的生産力を支えた生産技術の体系化によってのみ管理問題をとらえるという基本線が堅持されたのである。

それゆえに、基底的な問題として、土屋教授の所論では、アメリカに固有の管理問題展開の全体像が、互換制生産体系を軸とするアメリカ的生産技術の発展という意味での「大量生産体制」概念だけで規定しきれない、むしろ具体的には、生産関係の側面において、それをも包摂して展開されてゆく支配的資本の蓄積様式のなかに把握されなければならないという視点は見失われざるをえなかった。そして、この点は、教授が東部機械工業の対極において位置づけた中西部鉄鋼業では、「作業現場の管理の合理化を、企業にとって存亡にかかわる重大な課題とした企業¹⁴⁾」が存在することなく、管理問題を発生させる余地はなかったという歴史的理解に端的にあらわれているといえるだろう。

とはいえ、特異な生産力の発展をもたらしたアメリカン・システムにおける「大量生産体制」に着目し、それを東部機械工業の現実的展開のなかに根拠を求め、そこに管理の「体系化」と「科学化」との生産技術的基盤を見出す、という教授の歴史分析の方法に関する論点が評価されなければならないことはいうまでもない。

問題は、土屋教授が独占形成と管理問題との関連性を否定的にとらえようとするあまり、生産技術体系発展の一般的性格規定から管理問題の発生根拠を説明されたために、19世紀70年代－80年代の「能率増進運動」のもとにおける管理と世紀転換期の金融資本の成立以降における管理機構の本格的編成との間の基本的な質的变化の内実を問うことなく、もっぱら東部機械工業の管理問題との継承性・連続性のうえに近代的な管理機構の歴史的特質を理解しようとされたことである。したがって、近代的な管理機構の編成とそれを

めぐる管理問題の展開は、1870年代－80年代のいわば産業資本の発展過程の管理との決定的差異を明確にしつつ、世紀転換期以降の独占的蓄積様式のなかに確固たる位置づけを与えられなければならないのである。

- 1) 土屋守章稿「前掲論文」(2)『経済学論集』第32巻第1号、1966年、79頁。
- 2) 土屋守章稿「前掲論文」(1)、55頁。
- 3) この点については、林 正樹稿「技術・労働・管理の経営学—内部請負制度を中心として—」『商学論纂』(中央大)第15巻第3号、1973年、45－47頁を参照されたい。
- 4) 中川敬一郎稿「米国における大量生産体制の発展と科学的管理運動の歴史的背景」『ビジネス・レビュー』第11巻第3号、1964年、24頁。
- 5) 土屋守章稿「管理機構の編成原理」『商学論集』(福島大)第33巻第1号、1964年、65頁。
- 6) 土屋守章稿「前掲論文」(1)、53頁。
- 7) 土屋守章稿「前掲論文」(2)、73頁(注5)。
- 8) 土屋守章稿「前掲論文」(2)、73頁。
- 9) 土屋守章稿「前掲論文」(2)、75頁。
- 10) 土屋守章稿「前掲論文」(2)、74頁。
- 11) 土屋守章稿「前掲論文」(2)、73頁。
- 12) 土屋守章稿「前掲論文」(2)、74頁。
- 13) この点について、森杲教授は次のようにのべておられる。「解明さるべき根本問題は、一方でそのように特異ないわばアメリカ型の生産力発展の方向づけをもたらした『社会的背景』を明らかにすることであり、もう一方でそうした発展方向にとって機械工業が最も適合的な産業であったこと、あるいはアメリカの機械工業がそうした方向をよく体现しつつ発展しえたことを、生産工程に即して明らかにすることである。」と。(森杲稿「前掲論文」、58頁。)
- 14) 土屋守章稿「前掲論文」(1)、52頁。

(4)

以上において、土屋教授の貴重な歴史的洞察を含んだ所論に対して若干の批判的考察を試みたのであるが、教授が東部機械工業における互換制の専門機械による作業工程での分業を基盤とする「大量生産体制」の展開という側面から、管理の「近代化」の内容とその性格を把握する方向を提示されながらも、管理問題のアメリカ的特質の根拠をなすアメリカ資本主義の構造とその蓄積のメカニズムとの関連において必ずしも十分に解明されなかったとい

う点に焦点をあててきた。そして、その基本的問題点が「大量生産体制の技術的性格を専門化・標準化というレベルでおさえるにとどめたため、独占資本＝金融資本形成史の外で、アメリカ的生産力に言及するに終始した¹⁾」という方法的視角そのものにあることを明らかにしてきた。

したがって、教授の所論は、「大量生産体制」に内在する機械化一般の貫徹が東部機械工業で具体化し、そこに「合理化」問題が発生したと把握しているわけであるから、そこでは、アメリカ金融資本成立による蓄積様式の変化の特殊性と管理問題との関連が、視野に収められなかったことはむしろ当然のことであったといえよう。

それでは、このような土屋教授の方法的視角がもつ基本的問題点は、アメリカにおける管理問題の形成・展開に関する歴史的 성격の把握において、いかなる偏りをもつものとなっているのであろうか。

まずなによりも、南北戦争後のアメリカにおける「工業化」の展開を特徴づけるアメリカン・システムを担った東部機械工業が、結局、世紀転換期の独占的蓄積様式編成の基軸にはなりえなかった、という歴史的現実に着目しなければならない。この点は、管理問題の具体化の歴史的根拠をどこに求めるか、という問題にかかわって重要であると思われる。すなわち、それは、19世紀末からのアメリカ資本主義がその歴史過程において、いかなる重工業的蓄積を展開し、そこに管理のメカニズムをどう形成したか、という管理問題の歴史的 성격の把握に必然的に連動するものである。

アメリカの管理問題の実態解明は、まずもって、資本主義的生産関係に内在する「大量生産体制」下の生産技術体系と労働力構成それ自体に、全産業的領域における管理機構のアメリカ的特質を代表する歴史的必然性をみきわめなければならないとすれば、管理問題を発生させるにいたった典型的産業は、アメリカ独占資本＝金融資本成立の独自のメカニズムを確立した支配的資本の基軸的な産業構造に見い出さなければならないのではないだろうか²⁾。そして、その場合、アメリカ労務管理形成史の方法との関連において、管

理機構を資本・賃労働関係の結節点として位置づけるという観点からすると、ここで対象とされるべき問題の範囲は、労働市場の構造的変化を包摂し、全産業的領域での労働力の再生産構造にとっても基軸となりうる産業を中心にとりあげられなければならないということを前提とする必要があるだろう。

このように考えると、当面の問題を規定する、以上のような視角からすれば、東部機械工業の生産部面での「大量生産体制」の展開自体は、必ずしも労働力の供給構造を十分に編成しえたわけではなかったといわざるをえない。だが、土屋教授は、この点にはほとんど言及しておられない。むしろ、教授は、それを「19世紀後半の米国では、東部の産業社会と中西部の産業社会とでは全く異質であり、そこで展開された企業者活動にも大きな差異があった³⁾」という両者の差異性の強調によって解消してしまわれた。この理論的特徴は、教授が依拠した「社会的分業の構造＝生産力構造⁴⁾」の進展という視角に基因するもので、「生産関係なき生産力理論のアメリカ分析への適用⁵⁾」という批判をまぬがれないのである。

そもそも、19世紀末葉から世紀転換期のアメリカ資本主義が負わなければならない基幹産業の「近代化」の本格的展開は、「大量生産体制」を支えるものとしての労働市場の再編なしにはありえなかった。この労働市場の再編は、支配的資本を基軸とする「工業的アメリカ」の発展としての独占的な蓄積様式の独自のメカニズムにとって不可欠のことであった。そして、70年代－80年代とことなり、世紀転換期においては、この支配的資本による労働力創出機構が編成され、労働市場の構造的変化が、金融資本の成立と「全国的な規模をもつ重工業的産業構造の確立過程⁶⁾」にともなって展開した。これは、きわめてアメリカ的な事態であったといえるだろう。

ところで、中西部鉄鋼業における管理機構の編成が労働市場の構造的変化のありようをどのように反映したのか、というこの問題こそは、管理問題を独占的蓄積様式との関連でその歴史的な性格を解明するためには最も重要な点

なのである。すなわち、労働市場の構造的変化が、企業内労資関係の構造と動態としての管理問題をどう規定したのか、という点の歴史的考察をぬきにして、世紀転換期の管理問題の歴史的 성격および管理機構の編成のアメリカ的特質の解明はありえないといっても過言ではないのである。

もちろん、独占的蓄積様式が、アメリカ金融資本の成立過程において、賃労働のアメリカ的特質と労働市場の構造とにいかなる変化を与えたか、またそれが管理問題にどのようにかわりあったか、という点の歴史的実証分析はなかなか困難である⁷⁾。とはいえ、独占的蓄積様式の独自のメカニズムを編成した中西部鉄鋼業が、「大量生産体制」にともなう労働力の組織的編成を、いわゆる「新移民」の大量吸引をつうじて展開した歴史的事実だけは無視するわけにはいかないのである。

土屋教授も、保護関税とともに移民労働力の流入を中西部鉄鋼業の「大量生産体制」の条件として指摘してはおられるが、しかし、それは単なる外的条件としてのみであって、その内的関連については、ほとんど追究しておられない。したがって、中西部鉄鋼業の支配的資本の労働市場の掌握に対応して、労働力の供給構造を支えた移民労働力の存在形態は、単なる外的条件としてのみではなく、管理問題の内在的な歴史的 성격とその変化にきわめて重要な意味をもった、という歴史的現実に関する理論的整序が必要であると思われる。とりわけ、アメリカ労務管理形成史論にとって、この点の解明はさけてとおることができないと考えられるのである。

「ピッツバーグ調査」(Pittsburgh Survey) が物語っている⁸⁾ように、中西部鉄鋼業への「新移民」の吸引は、既存の社会的階級構成を解体せしめ、工場・職場での労働力構成の変化を最も顕著な形で具体化させた。そして、支配的資本としての中西部鉄鋼業での工場労働者の内的な階層序列編成をとおして、そこに固有の管理問題がはじめて顕在化してくることになった。したがって、中西部鉄鋼業は、労働市場の掌握をとおして、生産現場の管理機構の編成を推し進め、「大量生産体制」にみあう労働力構成と「直用制」への転換を

具体化しつつ、内部請負制を崩壊させ、工場・職場内での人種的階層分裂をつよめていったのである。

その結果として、新たな労働貴族層の創出・拡大をともなった急速な労働市場構造の変化がもたらされた。1892年のホームステッド闘争に敗北した合同鉄鋼労働組合（Amalgamated Association of Iron, Steel and Tin Workers）の組織と機能の衰退はそのことの証左であろう⁸⁾。すなわち、中西部鉄鋼資本による賃率、労働時間および仕事量をめぐる労務政策の展開のまえに、合同鉄鋼労働組合の政策体系は、完全に転換を迫られたのである。この歴史的展開のなかにこそ、独占的蓄積様式に一般的に組みこまれるにいたった、いわゆる「近代的」な労務管理の現実とその「科学的」な枠組みの形成をみてとることができるように思われる。

このようにして、独占的蓄積様式の基軸をなした中西部鉄鋼資本の運動は、労働市場の変貌をうけて、労働力構成の再編を具体化し、労働者階級内部に新しい労働貴族層をたえず創出しながら、アメリカ資本主義の構造的変化を主導する役割を果し、そこに工場・職場での管理のメカニズムを形成すると同時に管理問題を社会的一般的に顕在化させた。したがって、賃労働のアメリカ的特質をなす「新移民」の存在構造は、中西部鉄鋼業の生産技術体系と労働力構成の変化を媒介として、独占的蓄積様式のもとでの企業内労資関係を規定することになった⁹⁾のである。

いずれにしても、管理問題の歴史的な性格は、特異な性格を付与された独占形成・確立という生産関係の基本的変化とその段階に内在する「工業的アメリカ」の展開過程に即して、「大量生産体制」のもとでの生産技術体系の発展・労働力構成の変化という視点と、それに、すぐれてアメリカ的特質を刻印した賃労働の性格、労働市場の構造的変化という視点との両面からの歴史的な分析によって把握されなければならないのである。

- 1) 森杲稿「前掲論文」, 54 頁.
- 2) 森杲稿「アメリカ金融資本の類型把握の妥当性」『社会科学の方法』第 10 巻第 1 号, 1977 年, 井上巽稿「アメリカ型金融資本と『門戸開放主義』」『社会科学の方法』第 10 巻第 6 号, 1977 年を参照されたい.
- 3) 土屋守章稿「前掲論文」(2), 73 頁.
- 4) この点については, 楠井敏郎, 滝沢秀樹稿「比較経済史学における産業構造の意義」『歴史学研究』第 334 号, 1968 年, 39-40 頁を参照されたい.
- 5) 森杲著『前掲書』, 97 頁.
- 6) 森杲著『前掲書』, 241 頁.
- 7) この点については神代和欣稿「独占の成立と賃労働—鉄鋼業を事例として—」同著『アメリカ産業民主制』東大出版 1966 年, 所収論文が唯一の業績であろう.
- 8) Commons, J. R. and associates, *History of Labor in the United States*, Vol. II., N. Y., 1918, pp.495-497.
- 9) この点については, 労働市場の構造的変化と内部請負制の崩壊との関連把握の問題として稿をあらためて検討してみたい.

(5)

さて, 周知のように, 最近の管理問題の歴史的 성격の解明についての議論は, 土屋教授の影響もあって, 東部機械工業に問題の対象を限定する傾向にあるといっても過言ではない¹⁾. しかし, すでにみてきたように, 19 世紀末葉から 20 世紀初頭にかけての世紀転換期のアメリカ資本主義の構造変化を独占的蓄積様式の形成過程として位置づけ, そこに管理問題のアメリカ的特質を把握するという視点からすれば, 東部をはるかに凌駕し, その重工業的蓄積をとおしてアメリカ金融資本成立の基軸産業となった中西部鉄鋼業の存在意義はきわめて大きいといわなければならないだろう. アメリカ金融資本成立期の全国的規模での重工業的産業構造の確立過程にあって, 「工業的アメリカ」の基幹に抬頭し, 支配的資本としての地位をしめたのが中西部鉄鋼業であるという基本認識が, 管理問題の歴史的 성격とそのアメリカ的特質の解明にとって不可欠の理論的前提であると考えるのである.

しかし, 土屋教授は, 「中西部の鉄鋼企業は, その莫大な固定設備の稼動のために, 新技術のもとでの能率的業務を必要としたことは事実であり, 作業

現場の管理の合理化を全く無関心に放置していたわけではないであろう²⁾といわれながらも、A・カーネギーが「滅多に工場に顔を出さない超セールスマン (super salesman) であったこと³⁾」を根拠として企業活動をも中川教授いわれる「不羈奔放かつ強烈な個人主義的企業者活動⁴⁾」の部類に属するものとされ、結論的には、中西部鉄鋼業では、作業現場の管理の「合理化」が企業にとって重大な課題にはなりえなかった、として管理問題の究明の対象から除外されたのである⁵⁾。

教授は、管理問題の認識と独占形成とを結びつけ、「実証的な研究態度にもとづく独占形成の解明⁶⁾」を欠いたまま、アメリカ中西部鉄鋼業の独占的大企業の成立とのかかわりで管理問題を理解している方法的視角に対して、その根拠を歴史的条件のなかで決定的に否定しようとした。つまり、それにかわって、機会追求的かつ主体的な認識にもとづく、「作業現場の改善を通じての原価削減に対する企業主の積極的関心⁷⁾」の度合が、東部機械工業の企業者の進取の性格のなかにより強く生じたことを論拠として、東部的条件と管理に関する科学的接近の態度との結びつきの論理的整合性が強調された。そして、その理論的背景において、中西部的条件は、重工業的産業構造のうちに、東部的な互換制による「大量生産体制」とそのエートスをもちあわせなかった、という視点が伏在していたように思われるのである。

それゆえに、「19世紀末葉に管理問題を認識させた具体的な基盤は、独占企業そのものであったというある種の『前提』、また19世紀末葉に展開された管理手段は、テイラー・システムをも含め、当初から独占企業の管理手段として出現したという『前提』⁸⁾」は否定されねばならないとされる土屋教授の批判は、中西部鉄鋼業の管理機構の編成という歴史的現実をも否定しることによって、かえって世紀転換期の管理問題の歴史的性格と管理機構の編成のアメリカ的特質を把握する途をとぎしてしまうことになったのではないだろうか。

その結果として、70年代－80年代の東部機械工業の技術的基盤とそれに依

扱った企業者行動という点からのみ管理問題をとらえ、そこにアメリカ的な管理機構の体系化と「科学化」の起点を求めた教授の所論は、管理問題の歴史的 성격の把握に関してみた場合、やはり、かつて「比較経済史学」がうけた「生産力説だという批判」をぬぐいさることはできないといわざるをえないのである⁹⁾。

ところで、このような土屋教授の「管理問題認識の基盤」に関する理解を批判的に考察するに際して、森杲教授の次のような情況認識は基本的に重要である。すなわち、教授は次のようにのべておられる。「19世紀末葉は、アメリカの19世紀的な、多分に農業主導的な社会経済構造から、鉄道網の敷設を媒介にして本質的に重工業的な産業構造を明確に国民経済の中枢に押しだした時期であるとともに、その鉄道の集中を契機に独占資本形成の胎動がはじまった時期であった。その二つの時期がきびすを接してつづいたのである。その過程でのどんな事象に着目するかによってアメリカ史の段階づけの意味は変わるが、いずれにしろアメリカ本国においてフロンティアの消滅が宣せられた1890年の時点を決定的な転換点とするかんがえが、ほぼ定着しているといえよう。¹⁰⁾」と。また、教授は次のようにも指摘される。「アメリカの鉄道は、鉄道建設に直接つながる生産部門である鉄鋼業を、アメリカ中西部の地域性からひきあげて全国的市場を前提とする基幹産業の地位につけた。中西部の鉄鋼業は、アメリカで最初の全国規模をもつ工業になるわけである。資金面では、イギリスからの金融を媒介する国際的金融機関が、投資銀行という呼称をえてアメリカに定着し、これもはじめて真に全国におよぶ金融的支配の機構をつくりだした。この金融機関が鉄道への支配を媒介にして鉄鋼業と資本的にも融合したところに、アメリカ金融資本は成立する。これは金融資本形成史における、アメリカ独特の基本線である。¹¹⁾」(傍点—引用者)と。森教授の19世紀末葉からのアメリカ経済史の基本線に関するこの把握は、経営学の領域において、管理問題の歴史的 성격の全体像をアメリカ資本主義の構造的特質との関連で解明するという分析視角にとってきわめて示唆的であ

るといわなければならない。

このようにみてくると、管理問題の歴史的な性格とそのアメリカ的特質の解明は、森教授の指摘されたようなアメリカ経済史の基本線にもとづいて、全国的市場を掌握し、産業資本の確立過程を包摂して展開した金融資本成立期のアメリカ鉄鋼業における管理機構の編成という歴史的現実のなかに、管理問題の社会的経済的基盤を探究することによって果されなければならないだろう。「鉄鋼メーカーの機械工場がかれ（F・W・テイラー—引用者）の研究の技術的基盤であった¹²⁾」という指摘からも知られるように、中西部鉄鋼業は、全産業的重工業化によってそのような技術的契機を内包し、互換制的な技術的特異性をこえた「大量生産体制」を確立した一国的産業構造を編成していた¹³⁾。

したがって、大規模な装置生産体系によって独占的蓄積様式の急激な編成というアメリカ的土壌のなかでゆるぎなく定置された「大量生産体制」は、いわゆる「新移民」層の半熟練労働力を生産工程の基幹労働力群として組織化し、クラフトマンの特権的地位を解体させ、管理問題の特殊アメリカ的諸条件を創出したといえるだろう。すなわち、ここにはじめて、独占の形成・確立という生産関係の質的变化に内実化されたアメリカ資本主義の生産技術体系の発展とそれに見合う労働力構成の再編という史の実態にかかわって管理問題のアメリカ的特質が形成されうる客観的基盤をみいだすことができるのである。

すでにみてきたように、世紀転換期のアメリカ資本主義の構造との関連で管理問題の歴史的な性格を把握するという視角を堅持するかぎり、その方法的視角は、アメリカ中西部鉄鋼業のようにすぐれて独占段階的な再生産構造をもつ基幹産業それ自体に内在する管理問題形成の論理的かつ歴史的必然性をとらえることを優先しなければならないのである。

- 1) 最近の代表的な研究としては、山下幸夫編著『経済史—欧米』日本評論社 1977 年、山下高之著『近代的管理論序説』ミネルヴァ書房 1980 年をあげることができる。例えば泉卓二教授は次のようにのべておられる。「テイラーの管理問題の認識と、その原理および制度に反映した情況は、機械・金属加工業の『現場』であった点はとくに留意しておかなければならない背景であろう。」と。(泉卓二著『前掲書』, 2 頁.) また、この点に関連して、橋本輝彦教授は次のように指摘しておられる。「かつておうおうにして、『体系的』『科学的』管理運動は独占形成と直結して説かれていたが、近年は中川敬一郎氏の指摘などを契機に、こんどは逆に、切断して説きかねない偏向があったのを、19 世紀末のアメリカ資本主義の独占移行期という歴史的時期の中で、その適切な位置づけをもって、捉えることが必要だ」と。(橋本輝彦稿「アメリカ経営史の構成」『立命館経営学』第 13 巻第 1 号, 1977 年, 175 頁.)
- 2) 3) 土屋守章稿「前掲論文」(1), 52 頁.
- 4) 中川敬一郎稿「ニュー・イングランド産業革命と大量生産体制の発展」(2・完)『経済学論集』(東大)第 30 巻第 1 号, 1964 年, 49 頁.
- 5) しかし、例えばチャンドラー (Chandler, A. D.) の次のような指摘は注目されよう。
「金属製造業で、アンドリュース・カーネギーの企業ほど、効率的な調整と統制の技術を発達させた企業はなかった。」そして、「アメリカ鉄鋼業の歴史は、技術革新、エネルギーの集約的利用、工場設計、そして全般的な管理手続きが、いかに加工処理の量と速度の大幅な増加と、それに伴う作業の生産性の同様な向上を可能としたかを効果的に例証するものである。」と。(Chandler, A. D., *The Visible Hand, The Managerial Revolution in American Business*, Massachusetts 1977, pp. 266—269., 鳥羽欽一郎, 小林袈裟治訳『経営者の時代—アメリカ産業における近代企業の成立』(上)東洋経済新報社 1979 年, 461—465 頁.)
- 6) 土屋守章稿「前掲論文」(1), 49 頁.
- 7) 土屋守章稿「前掲論文」(1), 54 頁.
- 8) 土屋守章稿「前掲論文」(1), 48 頁.
- 9) この点については森杲著『前掲書』, 第 2 章を参照されたい。
- 10) 森杲著『前掲書』, 146—147 頁.
- 11) 森杲著『前掲書』, 123 頁.
- 12) 山下高之著『前掲書』, 116 頁.
- 13) この点について中村静治教授は、次のように指摘しておられる。「装置工業はその技術的特性から、いち早く機械化された連続的な流れ工程を採用し、設備を巨大なものとして、この分野の資本が相互に結合し、市場と資源の分割を協定して独占形成の先陣に立った」と。(中村静治稿「前掲論文」, 14 頁.)